



馬

東宝映画・映画科学研究所1941年作

演出・脚本……………山本嘉次郎
撮影……………唐沢弘光・三村明
鈴木博・伊藤武夫

製作……………森田信義
製作主任……………黒沢明
録音……………樋口智久
装置……………松山崇

出演者 高峰秀子、竹久千恵子、藤原鶏太、
丸山定夫、沢村貞子、小杉義男、清川荘司

【解説】

当季の山本さんの手記によると、ありきたりの映画製作にあきたらなくなって、「真に映画的材料と至誠愛情にあふれた主題」を探し求めていた山本さんは、昭和13年9月20日盛岡から中継された馬市の実況放送を聞いて心から感動させられ、ここにこそ自分の望んでいたものがある、これを素材にして全力をあげてみようと思案されたのが、名画「馬」のそもそもの発端でした。

これは山本さんがかねてから動物になみなみならぬ愛情をそそがれ、従って相当な知識ももっていたことが一つの基盤になっていたようですが、山本さんはそれからひたむきに現地の調査とそれにもとづく脚本の作成にうちこまれ、14年10月から正月1年5か月という長い期間をかけて「馬」の製作を進められました。

こうして16年の初頭に全14巻の大作が完成公開され、あらゆる人々に深い感銘を与えてその年のベストテン第二位に推されることとなったのですが、一少女の馬への愛情を2時間10分もの間強くおしだすだけで、とりたてて劇的なハランのあるわけでもないこの作品、そしてすこし長すぎるという批判さえ相当にあったこの作品が、どうしてそのような結果を生ずるにいたったのでしょうか。

山本さんの馬をいつくしみいとおしむ気持ちが、高峰

さんの演ずるヒロインの悩みと喜びを通して、またそれと一体化した馬の姿を通してみごとに具象化されたこと、それらをつつむものとして農村の四季の風物・行事が実に美しく描きだされていたこと、こうした点がいささかの不備にもかかわらず見る人の胸を強くうつものであることはすぐわかります。

こういう要因はいつの世にも共感と呼ぶものですがしかし「馬」が発表された当時はとくにアピールする力が大きかったといえます。日中戦争が泥沼に足をふみこんだ状態となり、9か月ほど後には太平洋戦争の幕が切って落されようとしていた当時、国内には戦時色がまことに重苦しくたれこめてくりかえされる滅私奉公の叫び声が国民のすべてを金じばりにしていました。自由に息もできないような気持ちにおそわれていた人々は、「軍馬御用」を一つの因子にしているとはいえ別に国民精神総動員の線にそっているわけではなく、逆に本来の人間性をあますところ発露させるという態度が全篇をつらぬいているこの映画に接してほんとうに生きかえるような清風にいだかれた思いをしたにちがいありません。山本さんの意識してのレジスタンスという解釈はあたらないかと思いますが、あの時代にこうした作品を送りだした山本さんの見識と情熱には敬意を表すべきものがあります。

この映画についても一つ見のがせないのは、そこに映画の記録性があざやかに強調されていることです。当時「これは劇的な因子を用いて作られたドキュメンタリ映画だ。」という批評がありました。が、「馬」はたしかにそういう面をこれは意識もっています。一般向きの劇映画の中でこれほど農村の風物をたねんに描いたものはないでしょう。それからこれほど馬の姿態に集中したものはないでしょう。しかもその農村の風物は単なる背景としてとりあげられたものでなく、その馬は単に点景的存在として扱われてはいません。風物はヒロインの馬へのいつくしみを必然に生み出す基盤であり、馬は農民の文字通り一体化しているものとして主演者のひとりになっています。(実際は馬だけ

が主演している場面もかなりあります。)

こしらえものでない農村を愛情をこめて描きだしたものであることは、このすこし前にできた「土」とならんで「馬」が先駆的な名誉をにないうるといえるでしょう。ただ「土」とちがって「馬」には社会問題的な観点があまり見られません。借金に苦しむ話もあり、娘たちが糸工場に出ていく話もありますが、それらは別に深く掘りさげられてはいません。作者は農村の牧歌的な風物と心情に心をひかれただけで、皮むいた窮乏の現実はまだ突っこもうとしない、だから農村をほんとうに描いたものとはいえない、という批判がここから当然出てくることでしょうが、それには当時の情勢を考えあわせることが必要だという見方も無視できないと思います。

この農村の風物や馬のとりあげ方については、映画の原初的な記録性に身をまかせすぎている、という一つの批判が提出されています。これももっともな点がありますが、しかしあまりにもこしらえもので充満している映画界に、この作品をつらぬく詩情ゆたかな記録の手法の駆使が、新鮮な驚きと喜びをもたらしたことは否定できません。春を唐沢、夏とセットを三村、秋を鈴木、冬を伊藤と、四人のカメラマンが分担して撮影した画面には、しみじみと訴えかけてくる情景がたくさんあります。

とにかく「馬」は、山本さんのすぐれた見識とひたむきな情熱、それにりっぱに協力したスタッフのけんめいな努力(その成果の中には高峰さんの今日ある土台がここにきずかれたこともあげられます)によって、当時の人々に心あたたまる感動を覚えさせ、有意義な論点を提供してくれただけでなく、今日見ても鑑賞と研究にたえるものをじゅうぶんもっています。当時ですらある程度の不備が指摘され、今日の観点からはさらに検討を要するものがあるにちがいありませんが、それは昭和13~16年という製作年代をいっおう考慮にいれてのことにしていただきたいと思います。

(関野嘉雄)

(9月17, 21, 24, 28日, 10月1, 5, 8, 12日の8回, 毎回2時から上映)

国立近代美術館フィルム・ライブラリー

馬

1958. 9 ~ 10

上映映画解説

No. 54